

おちば／刈り取った後の田や畦・稲架の下に落ちている穂のこと。一粒の米も無駄にしないという思いから、落穂拾いは大事な仕事であった。

らしく

自分らしく、
粹なくらし



CLOSE UP

自然と共存し豊かに生きる

NPO法人もりメイト倶楽部 Hiroshima

私たちの暮らしを守り、恵みを与えてくれる森を育てる

広島干潟生物研究会

身近な自然、干潟で学び、伝える

京橋川かいわいあしがるクラブ

アシの循環サイクルを通して、地域交流や環境保全を促進

連載

▶らしくレポート ひろ記者が行く・比治山発! 世代を超えて体感する『クリエイティブ空間』

▶らしくコラム・自然を守る市民科学の力 ▶ようこそ! 公民館へ～中区内公民館～ ▶人材バンク 名人 宝人 達人

▶Hmi助成支援団体のご紹介 ▶情報の森 ▶プラザ通信



私たちの暮らしを守り、
恵みを与えてくれる森を育てる

木エクラ外教室の様子

CLOSE
UP

自然と共存し豊かに生きる

私たちが生きるうえで欠かせない自然。まちに暮らしながら、身近にできることから学び、活動している団体を紹介します。

NPO法人もりメイト倶楽部 Hiroshima

<http://www.morimate-ch.com/>

森づくり、森から学び、森を楽しむ

平成9年、広島市が主催した森林ボランティアリーダー養成講座で一年間、森林整備のノウハウを学んだ第一期修了生が中心となり設立したのが「もりメイト倶楽部 Hiroshima」です。20代から80代までの約200人が在籍。4つの部会「出前間伐」「里山」「クラフト」「環境教育研究」と毎月開かれる例会を中心に、広島市内と近隣市町で活動しています。

「一年間、森林の手入れに関する基礎知識と技術の習得を目的に学ぶ中で、せっかく学んだ知識と技術を活かし森づくりに貢献したい、と考え一緒に学んでいた25人に講師などを加え35人ほどで始めました」と語るのは、設立当時のメンバーで顧問の
みせい 誠さん。

「私たちが生きるために必要な酸素や水を育み、大きな力を持つ森が、木材価格の低迷や林業関係者の高齢化、生活の変化などの理由から手入れがなされず荒廃しています。その多くが樹木や竹林の密集により、森林本来の機能が失われていることから、

その森を再び育てて、学び、伝える取り組みをしています」。

メイン行事である例会は、地域貢献プロジェクトと称して各地域の人たちと一緒に、技術安全研修を兼ねた森林整備活動を行っています。部会の「出前間伐」は、自治体などからの要請に応じて、杉・松の植林地の間伐・枝打ち・下刈りなど、人工林の手入



▲ 間伐作業の様子



▲ 学生がリーダーとなり活躍の様子

れを行っています。「里山」は、雑木林や竹林の整備をはじめ炭焼きや椎茸栽培など、里山の恩恵を活かす文化の伝承を目指しています。「クラフト」は、木を使うことは森を育てること、森のいのちを活かすこと、と考えて、手入れて出た間伐材など森の材料を利用してベンチ製作や置物など木工クラフトの指導を行っています。「環境教育研究」は、子どもの森林ボランティアを養成する講座もりメイトキッズや、森林体験教室の企画や実施など、森の大切さ、守り方を伝えるリーダーを目指して活動しています。

幅広い世代のメンバーは、森の大切さを学んだり、森を活かしながら、森のおいしい恵みを堪能するなど、楽しんで活動しています。日常生活と違う自然の中で、ひたむきに汗を流して森林整備に取り組むことで感じる達成感は格別だそうです。



▲ 椎茸栽培 菌打ち作業の様子

森を未来へ残したい、伝えたい

「もりメイト倶楽部 Hiroshima」としての活動以外にも、広島市内で活動を行っている自然環境保護関連団体との連携も積極的に行い、共同で活動を行うこともあるそうです。

「今後は、森の重要性を伝える啓発活動と、間伐材の有効活用を行う活動にもっと取り組んでいきたいですね。荒廃している森でも、きちんと手入れすることで、森が生き返り、自然の恵みをもたらしてくれることを次世代にも伝えて、それをまた伝える人材を育成していきたいと思います。また、あまり知られていませんが、広島市の約7割近くは森林です。その森林の間伐を適度に行うことはとても重要なことで、土砂災害の防止にも繋がり、私たちは安心安全な暮らしができます。そういった大切な情報を正確に伝えることも、われわれの役目だと考えています」と見勢井さんは語ってくれました。

「もりづくり、私にできることから」を合言葉に技術を磨き、学び、楽しみながら20年も活動を続けている皆さんのひたむきな姿に、自然を守ろうとする力強い意志を感じました。



▲ チェーンソーの指導を行う 見勢井誠さん(右)

らしっく c o n t e n t s

Vol.49
落穂号
2017.11

特集

01 自然と共存し豊かに生きる

- ▶ NPO法人もりメイト倶楽部 Hiroshima
- ▶ 広島干潟生物研究会
- ▶ 京橋川かいわいあしがるクラブ

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

- ▶ 比治山発! 世代を超えて体感する『クリエイティブ空間』

らしっくコラム

- ▶ 自然を守る市民科学の力
広島工業大学 環境学部
岡 浩平 准教授

06 ようこそ! 公民館へ・中区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

- ▶ 西田 元一さん
- ▶ ひろしま紙芝居村

09 Hmi助成支援団体のご紹介

- ▶ 牛田三区区活性化フォーラム
- ▶ アリスガーデンパフォーマンス広場事業実行委員会
- ▶ 影絵ユースワークショップ

11 情報の森

15 プラザ通信



【表紙写真】間伐作業で切り出した木を運ぶ様子

身近な自然、干潟で学び、伝える

広島干潟生物研究会

<http://kankyouseibutu.blog.fc2.com/>

全国でも類を見ない恵まれた環境

平成24年に、干潟の現地観察や室内での実験、講義、写真展等を通して、干潟に生息する動物、植物に親しむことなどを目的に設立されたのが「広島干潟生物研究会」です。



▲ 巡回写真展の様子

「まちの中心部を6本の川が流れる広島市は、日本の県庁所在地の中で塩生植物の群落の面積が最も広い都市。つまり、干潟に生息する植物や動物を観察する場所としては恵まれた地域なんです。残念ながら、そのような環境がすぐ身近にあることはあまり知られておらず、もったいないと感じています。観察会などの活動を通して、子どもから大人まで多くの人に、干潟の生物について知ってもらい、親しんでもらいたいです」と語るのは事務局のくやみつおさん。

現在、広島県・山口県の小中高生66人、大人50人の116人が在籍。太田川河口や元宇品、八幡川河口、江田島を舞台に、時期や場所に応じて、そこに生息する動物や植物の観察会を年に5〜7回開いています。

豊かな生態系を観察し、その価値を伝える

「観察会は、会員以外も参加可能で毎回80人前後、多い時には130人も参加があります。広島デルタの河川や干潟に生息するカニだけでも25種類。他にも、鳥や魚、貝なども含めるとかなりの種類の動物が生息。これに、アシ、フクド、ハマサジ、ハママツナといった塩生植物も観察対象になります。太田川河口以外にも、



▲ 猿猴川河口での観察会の様子

京橋川流域や、猿猴川河口も観察には適した場所ですね」。

また平成26年からは、観察会で撮った生物の写真をパネル化し「広島デルタの生きものたち」と題した写真展を、広島市内の公民館などを巡回する形で開いています。幅広い世代の人たちに干潟に生息する動物や植物についての周知活動を行い、まずは興味を持ってもらうことにも取り組んでいます。

さらに平成28年からは関連団体との共同で、干潟生物の研究活動の発表に加えて、科学研究の発表や実験なども盛り込んだ「広島ジュニアサイエンスフェア」を開催。生物研究を通して科学に迫る、その楽しさに触れてもらうユニークな活動にもチャレンジしています。

「広島干潟生物研究会としてスタートして5年余り。設立当時のメンバーが大学生になり、長期休暇を利用するなどして活動をサポートしてくれていますが、まだまだ子どもたちには教え足りないことばかりです。今後は、教える側を育てると同時に、もっとこの恵まれた広島のフィールドを活かして、干潟について研究・発表する場をつくり、多くの広島市民の皆さんにも干潟の魅力について知ってもらいたいですね」と、くやさんは語ってくれました。広島だからこそできる環境を活かした今後の活動に、大きな期待が寄せられます。



▲ 太田川河口での観察会の様子



アシの循環サイクルを通して、地域交流や環境保全を促進

京橋川かいわいあしがるクラブ

アシ舟造りから広がる活動

平成16年に実施された、13メートルにも及ぶ巨大なアシ舟を有志で造って、環境保全と平和記念のために厳島神社に参拝するプロジェクトがきっかけで、平成17年に結成されたのが「京橋川かいわいあしがるクラブ」です。

「材料集めから完成まで延べ2ヵ月。約200人のボランティアの手で造り上げたアシ舟に、1回に13人のクルーが乗り込み、昔ながらの手漕ぎで、風と海流に負けないように力を出し観音から宮島まで漕ぎ切った時の達成感、何物にも代え難いものでした。この時は単年度の試みでしたが、アシ舟造りの技術や、仲間との結束を終わらせずに次につなげたいと思い結成しました」と代表の山本恵由美さん。



最初は、山本さんを含む5人でスタート。京橋川沿いの白潮公園（中区白鳥九軒町）を拠点にした活動では、川沿いに覆い茂るアシを刈って、舟を造り実際に川で漕ぐほか、四季に応じたさまざまなイベントを展開しています。「アシは、チッソやリンを吸収することから、定期的に刈り取って手を加えることで、成長を促し、二酸化炭素の吸収、水質浄化作用を促進させます。それが結果的に川の浄化につながり、生き物にとっても良い環境をつくることにもなるんです。美化活動と同時に、イベントに参加する人たちの交流も生まれていますね」。

最初は、山本さんを含む5人でスタート。京橋川沿いの白潮公園（中区白鳥九軒町）を拠点にした活動では、川沿いに覆い茂るアシを刈って、舟を造り実際に川で漕ぐほか、四季に応じたさまざまなイベントを展開しています。「アシは、チッソやリンを吸収することから、定期的に刈り取って手を加えることで、成長を促し、二酸化炭素の吸収、水質浄化作用を促進させます。それが結果的に川の浄化につながり、生き物にとっても良い環境をつくることにもなるんです。美化活動と同時に、イベントに参加する人たちの交流も生まれていますね」。



▲ アシ舟づくり講習会の様子



▲ 川辺の文化祭の様子（春）



▲ アシ舟、カヌー体験（夏）



▲ アシ刈りの様子（秋）



▲ とんど祭りの様子（冬）



▲ メンバーの皆さん

一年を通してアシを使い、地域の交流を生む

春は川辺の公園を舞台に、大学生ボランティアも参加しての川辺の文化祭を開催。夏はアシ舟造りやカヌー体験。秋にはアシ刈り、その刈ったアシを使って冬には干潟でとんど祭。その他にも、干潟の生物観察やアシ原の清掃など、アシを軸にした多彩な活動をしています。また、散歩や公園に来た人たちも気軽に立ち寄ってもらえるように「あしがるカフェ」もオープンし、憩いの場をつくり出しています。

「生活に身近な自然に触れることで、人と自然の関係について考えるきっかけが生まれます。秋に刈ったアシを乾燥させたもので、翌年アシ舟を造る。モノづくりの面白さと感動を伝えることができます。また使い終わったアシ舟などは、燃やして灰やチップ化して堆肥を作り、地域住民の菜園や公園の花壇に使っています。こうした一連の循環サイクルを知ってもらうことで、身近な環境問題について考えることができると思います。住民にもどんどん参加してもらい、地域づくりにも繋げたいですね」。山本さんは、今後について語ってくれました。身近な川を活かし、地域に根付き交流が生まれている活動に、人づくり、まちづくりの大きな可能性を感じました。